

元朝驛傳雜考

一 緒 言

顧れば既に二十有一年の昔である。明治四十二年七月發刊の東洋協會調查部學術報告第一冊に於て、余は蒙古驛傳考と題する一小篇を公けにした。この一小篇は余が覺束なくも足を學界に入れた最初の一步の記念であるが、後にしてこれを繙くごとに、その歩み振りの危さに悚然として懼を爲すの情、愈々深きを加へるのであつた。爾來幾度かこれに補正を加へて、識者の教を乞はうと思ひつゝも、遂に今日に至るまで志を得なかつたのは慚愧に堪へぬ。今東洋文庫で永樂大典の站に關する史料を收めた部を複印するに因んで本論を草し、往年論述した所の誤を正し、足らざるを補ふ機會を得たのは、深く幸とする所である。この一篇の目的とする所は主としてかゝる點に存するから、更めてこゝに元朝の驛傳に就いての總考を試みるのでは無く、前に述べた所と關聯する數個の問題に就いて論述するに過ぎぬ。従つて論題も蒙古驛傳考補正とでもする方が妥當であると考へるが、述ぶる所多くは元朝の驛傳に關することであるから、敢てこの題目を附することゝし、讀者の諒解を願つて置く。

二 永樂大典所收經世大典站赤門に就いて